

# 正念誦の観法の基盤思想について

松本亮太

## 0. はじめに

正念誦の観法の基盤思想について

正念誦は『四度次第』に説かれている作法で、「入我我入」「加持念珠並に念誦法」「字輪観」と連なる一連の作法の中、「加持念珠並に念誦法」のことを指す。この作法について『智山伝法院選書』1011にて布施浄慧師は、念誦法における最重要な項目として入我我入観・正念誦・字輪観を挙げて、「この入我我入以後は、この行の肝要なところで、前項までは供養分であったが、本項より念誦分として、正行である。入我我入と正念誦と字輪観は、次第の如く身・語・意の三密成仏を意味し、自覚・覚他・覚行円満に当たるのである。即ち本尊と行者は無二無別の観に入つて、自身即ち本尊三昧を証し、即身成仏を顕現せんとするところである」と述べている。修法中の「正行」であり、最秘観の一つである。現に著者自身も四度加行伝授の際、阿闍梨より正念誦は最も丁寧に修すべきであると伝えられた。つまり、我々真言宗の経説の中心となる即身成仏を成就するための最も重要な

修法の一つであり、身口意の三密で言えば、正念誦は口密に相当する部分の修法である。

本稿では、この正念誦に用いられている観文の起源をたどるとともに、大乘經典のどのような思想が元となったものであるかを検討するものである。もちろん大乘經典では三密行や入我我入観が直接説かれているわけではないが、正念誦の基礎的な要素である「本尊瑜伽」「説法（転法輪）」「旋陀羅尼」「光明相」は、大乘經典に説かれる神変の様相が念頭に置かれており、それは密教の念誦法、とりわけこの正念誦の観文の萌芽となっていると考える。それによって、我々が日々修する正念誦作法の奥深さを再認識するとともに、その中に諸大乘經典に説かれる思想が浸透していること、特に今回は神変思想の重要性を示したい。

### 1. 正念誦とは何か

正念誦とは、五種念誦のうちの三摩地念誦のことであり、行者が禪定の心に住して真言の字相を観念すること<sup>②</sup>をいう。五種念誦とは、『秘藏記』<sup>③</sup>に説かれる説であり、以下のとおりである。

- ①蓮華念誦：自分の耳に聞こえる程度で他人に聞こえてはならない。
- ②金剛念誦：口を合わせ舌端を動かして誦える。
- ③三摩地念誦：心月輪に真言の字を観ずる。ただし真言の字相を観ずる。
- ④声生念誦：心蓮華の上の商佉（白貝）より妙音声を出す。
- ⑤光明念誦：口より光明を出す<sup>④</sup>と想って念誦する。

一座行法の肝要である身口意の三密行のうち、入我我入観が身密行、正念誦が口密行、字輪観が意密行にあたる。正念誦は、行者の語業と本尊の語密とが不二であることを修する観法であり、語密成仏の秘観であり、加持

成仏の妙行とされる。三種の観法は、優劣・高下の差別はないとされるが、とりわけ正念誦が重要視され、略観のときには三観を撰して、ただ正念誦のみを修行することもある。また散念誦が化他法門を宣説するのに対して、正念誦は内証の法門を宣説するともいわれる。

## 2. 幸心流の正念誦

智山派では幸心流を所定の法流としている。「金剛界」について言うと、幸心流では伝統的に、伝授では元泉が編纂した『金剛界念誦私記』、いわゆる『広次第』〈広〉を用い、実習では成賢が編纂した『金剛界念誦次第』、別名『都督次第』を用いるのが習いであるが、現状は『都督次第』に基づいた現行の『金剛界念誦次第』〈現〉によって伝授と実習が行われている。「十八道」「金剛界」「胎藏界」「不動護摩」と正念誦の観文は共通しているので、ここでは「金剛界」の『広次第』に見られる正念誦の観文を確認してみる。

〈現〉観念せよ 本尊の心月輪の上に陀羅尼の字有り 右に廻りて列り住す 又自心の月輪の上に陀羅尼の字有り 亦復是くの如し 本尊の誦じ下う真言の字 尊の口より出でて我が頂より心月輪の上に至つて右に廻りて列り住す 我が誦ずる真言の字 我が口より出でて 尊の臍輪より心月輪の上に至つて 右に廻りて列り住す

修習念誦法 以此勝福田 法界諸有情 速成菩提道

〈広〉かくの如く誦し已て三度頂戴して、次に胸の前に三返回転して、すなわち右の手の空風二指を以て母

珠を取り、左手の同じき二指を以て余の珠を取り、地水火の六指直く申べて心に当て二手相い去ること五寸計りにして目を合わせ、分明に本尊の身体威儀を觀じて、しかもその御胸の中に於いて八葉の蓮華を想え。その上に心月輪を想え。心月輪の上に陀羅尼の字を想え。右に廻りて列なり住せり。又、自らの心月輪の上に陀羅尼の字ありて、またまたかくの如し。本尊の誦したもう真言の字、尊の口より出でて我が頂より入りて心月輪の上に至つて右に廻りて列なり住す。我が誦する真言の字、我が口より出でて尊の臍輪より入りて心月輪の上に至つて右に廻りて列なり住す。本迹の義、前に准じて知んぬべし。かくの如く展転相續して緩ならず、急ならず。除々にして珠鬘を旋らすが如く念誦して字道をして分明ならしめよ。但し字を以て白色ならしむべし。

修習念誦法 以此勝福田 一切諸有情 速成大日尊

広略の正念誦觀文における大きな相違点は、「本迹の義、前に准じて知んぬべし。かくの如く展転相續して緩ならず、急ならず。除々にして珠鬘を旋らすが如く念誦して字道をして分明ならしめよ。但し字を以て白色ならしむべし」という部分が、現行の次第では省略されている点である。それ以外の部分は現行の次第と多少の表現の違いはあるが内容はほぼ同じである。この相違点のなかで、とくに注目すべき箇所は「字を以て白色ならしむべし」という部分である。これは如何なる意味であろうか。

この觀文について、頼瑜の『薄草子口決』に「聖觀自在軌に云わく<sup>5)</sup>と云つて、『聖觀自在菩薩心真言瑜伽觀行儀軌』を典拠に示しているので、確認してみよう。

不空訳『聖観自在菩薩心真言瑜伽観行儀軌』<sup>6)</sup>

即ち観ぜよ、本尊の心上に円満寂靜の月輪あり。月輪中に於いて、右に旋りて陀羅尼の字を安布せよ。其の字、皆な白色の光を放ち法界を遍周す。其の光、還り来たりて行者の頂に入る。瑜伽を修する者の心月輪中に於いて、前に准じて右に旋りて布列し了了分明にせよ。其の字、復た光明を放ち、前に准じて観を作せ。是の如く観じ已りて、瑜伽を修する者の自身、本尊の観自在菩薩の身と等しく無差別なり。彼の鏡像の如く、不一不異なり。

これによると、『広次第』で見られたような、誦した真言が口より出たり、臍より入ったりという表現はないが、基本的な旋陀羅尼の瑜伽観法を修するという構造は同様である。正念誦観文における「字を以て白色ならしむべし」とは、上記のとおり、陀羅尼の文字が白色の光を放つことを意味していたのであるとわかる。さらに、その光は法界を遍周したのち、還つてきて行者の頂より入るのである。そして最終的には行者自身が本尊の観自在菩薩と等しくなることが説かれる。それはあたかも鏡像のように、行者と本尊とが無二無別となるのである。

すでに經典において、正念誦観文の原型が見いだされることがわかるが、このほかにも、いくつかの密教経軌にこの正念誦の典拠となるもの<sup>7)</sup>、およびその観文を想起させる文言が説かれているので、それらを順次紹介していきたい。

### 3. 密教経軌に見られる旋陀羅尼及び光明相について

正念誦において、「本尊の心月輪の上に陀羅尼の字あり、右にめぐりて列なり住す」という文言がある。この

旋陀羅尼の觀法によつて、本尊と行者の三密が相応し、無礙渉入することができる。その觀法が『不空羼索神變真言經』に見られる。

菩提流支訳『不空羼索神變真言經』<sup>9)</sup>

時に別に先ず奮怒王真言を誦し、召請し供養して溥遍心印真言を誦し、一一の字声色相光焰あつて、黄光焰、或は赤光焰、或は白光焰、或は青光焰、或は黒光焰の若くの真言の字を照らし、心月の上に於いて右旋し行転して皆な光明を放つ。十千萬を満じ、中夜時に当たつて、十一面觀世音菩薩、種種光を放ち、五更の時に至つて觀世音、身を現じ慰語したまわん。

この『不空羼索神變真言經』所説の「普(溥)遍心印真言」<sup>10)</sup>を念誦する作法に、密教觀法と非常に近い旋陀羅尼を見ることができる。真言の文字がきらびやかな光をそなえて字を照らし、行者の心月輪の上で、その文字が右に旋転して光明を放つという瑜伽觀法である。そしてこの旋陀羅尼の觀法によつて、觀自在菩薩がまさしく行者の御許に現前することが説かれている。

またいわゆる字輪觀にも通ずる旋陀羅尼の觀法の原型が、『華嚴經』「入法界品」に見られる有名な四十二字門を字輪として觀想する方法を説いた儀軌に見られる。

不空訳『大方広仏花嚴經入法界品頓証毘盧遮那法身字輪瑜伽儀軌』<sup>11)</sup>

復た月輪内に於いて右に旋りて四十二の梵字を布列し、悉く皆な金色にして、大光明を放ち十方を照徹し、

分明に顕現す。一一の光の中において、無量の刹海に、無量の諸仏あり、無量の衆の前後に圍繞するあり、菩提場に坐し、等正覚を成じ、智、三際に入り、身、十方に遍じ、大法輪を転じ、群品を度脱せしめ、悉く無住涅槃を現証せしむることを見る。復た応に般若波羅蜜四十二字門に悟入し、一切法の皆な無所得なることを了し、能觀の正智と所觀の法界と、悉く皆な平等にして、無異無別なり。瑜伽を修する者、若し能く是の旋陀羅尼觀行と相応すれば、即ち能く毘盧遮那如来の智身を現証す。

ここでは、自心の月輪の上に梵字を廻らす觀行が説かれている。そして、その文字が金色の光を放ち、十方を照らし出す様子が描かれる。さらに光明のもたらす効果として、光明の中に、無量の国土、仏、衆生が現れ、その無量の諸仏が菩提道場で悟りを開いて三世十方に遍いて、大法輪を転じて、衆生を救い、涅槃を得させるといふ、この娑婆世界の積尊と同様の情景が無量の国土で起こっていることが見られるのである。そして、この四十二字門に入って、毘盧遮那如来の智身を現証すると説かれる。旋陀羅尼の觀法において重要な点は、光明が十方を照らし出し、その一つひとつの光の中に無量の諸仏が現じて大法輪を転じて衆生を利益するという描写である。旋陀羅尼の觀法における、十方が光明に溢れるイメージは次の經にも示される。

不空訳『金毘羅童子威徳經』<sup>(12)</sup>

爾の時、如来は結跏趺坐して、旋陀羅尼の三昧に入りたもう。其の頂毫より千光明を放ち、一一の光の中に各の百千化仏あり。復た千光明を放ち、遍く此の三千大千世界を照らし、上は非想非非想天に至り、下は四十二億恒河沙等の世界を照らす。其の光、復た東方の四十二億恒河沙仏国を照らし、東西南北四維上下皆

な悉く普く照らす。時に十方の大地、六反震動す。

すなわち、この旋陀羅尼の三昧に入ることによって、全世界が光明で照らし出されるのである。そしてその光明の中に百千の化仏を現わし出すのであるが、これは『ジャータカ』やアヴァダーナに説かれる有名な舍衛城の神変というエピソードに現れる「千仏化現」と呼ばれる神変に由来していることが想像できる。また、六反震動は六種震動とも言い、仏が説法するときの瑞相である。諸大乘經典において仏が光明で十方を照らす時、この六種震動が起こる。

不空訳『甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌』<sup>13)</sup>

瑜伽者即ち觀ぜよ、此の聖者本尊の前に在りて蓮華台上に坐し、頭冠瓔珞ありて天女の形の如し、左手に五股金剛杵を持し、右手、施無畏の勢なりと。即ち想え、部母の口中より金字の本尊の密言を流出し、行列して具に光明あり、瑜伽者の口に入り、舌の上に於いて右に旋りて華鬘の如しと。是の如く觀行を作し已りて頂上に此の印を解散せよ。…中略…想え自らの口中より却りて本所持の密言を流出し、金字行列して部母の口に入る。

ここでは、光明を伴った密言が部母と行者を行き来する様子が説かれている。現行の次第における正念誦作法のように頂や臍は登場せず、口と口ではあるが、この光明が身体に入り込み仏と一体となるという觀法は正念誦作法において重要な要素であると考えられる。

以上のように、本節では光明相と旋陀羅尼が見られる密教経軌をいくつか紹介した。正念誦作法の観文の直接の典拠と見られるのは、前節で紹介した『聖観自在菩薩心真言瑜伽観行儀軌』であると見られるが、その他の密教経軌の中にも、光明と関連させて陀羅尼や梵字を旋らす観法や、光明が行者と本尊を行き来する描写が多く見られた。特に光明相に関して言えば、さらに詳しく説かれている経軌も見られ、その内容は大乘経典に描かれている神変を起源とするものと予想される。

#### 4. 『華嚴経』に見られる神変思想と光明相

正念誦の観文に関わると考えられる経軌では、①心月輪のなかで陀羅尼・梵字を右に廻らす。②陀羅尼は光明を放つ、③光明は十方世界を照らし出す、④その光の中に無数の仏が化作し、衆生利益を果たすなどの奇瑞がある、⑤光明を伴った陀羅尼が身体に流入する、⑥旋陀羅尼の観法によつて自身に本尊が現証されるなどの特徴があることがわかった。これらの光明の様相・内容は、大乘経典に描かれる神変の記述を想起させるものである。

ここで、神変について少し述べておく。仏教経典には、さまざまな超自然的能力が描かれ、そういったものを神変と呼ぶのであるが、それは仏菩薩たちの偉大性や経典の内容を理解させるための重要なエッセンスとなっている。原始・小乗仏教の頃から、修行した者は六神通（大乘仏教では五神通を多く用いた）という人間の能力を超越した力が得られるとされ、これは大乘仏教にもそのまま受け継がれているし、また、釈尊の顕わした舎衛城の神変は有名なエピソードである。

さて、そのような原始仏教の頃から見られた神変から、大乘仏教に入ると急激に大規模なものに発展し、無限の広がりを見せるような神変が語られるようになった。しかし、これまでは、経説の内容を色付けする要素とし

てのみ語られてきたような節もあつたのであるが、梶山雄一氏はその研究で「神変が初期大乘仏教においてもとも基本的かつ中心的な意義をもつ思想であることを論ずるものである」<sup>14)</sup>とその神変の意義を認め、重要な資料を提供してくれている。

重要な初期大乘経典はみな仏・菩薩の神変を語っているのであるが、梶山の論考でこの初期大乘経典に現れる神変の特色を五項目に分類しているので、そのまま紹介する。

(1) 仏の三昧が神変の前提である

(2) 神変の主役は仏の放つ光明である

(3) 光明は仏の化仏を産み、また光明は化仏の説法の声となること(この三項目は小・大乘に共通。以下は大乘の神変に特有)

(4) 衆生の側にいかなる要求もしないで、釈迦仏の放光に遇う衆生を無上正等覚に至ることに決定させ、悪趣の衆生を善趣に生まれ変わらせ、心身障害者や病者を癒し、悪人を善人に変えるという、いわば他力の救済を約束する

(5) 全宇宙の諸仏国とこの娑婆世界との間に相互照見を可能にさせ、同時に十方諸仏国からくる菩薩たちが釈迦仏を礼拝・供養することを契機にしてこの娑婆世界が浄土に変容する。

こうした初期大乘経典から見られる神変思想の基本的な骨格が、密教観法である正念誦の光明相にもそのまま受け継がれていることをうかがうことができる。

しかし、「光明が身体に流入する」という要素については梶山氏が挙げた初期大乘経典に共通する特色には挙げられていない。そこで、『観普賢菩薩行法経』にその要素を見ることができたので以下に紹介する。

曇無蜜多訳『観普賢菩薩行法経』<sup>15)</sup>

釈迦牟尼仏は眉間の光を放ち、其の光、十方世界を遍照し、復た十方無量世界を過ぐ。此の光の至る処の、十方の分身の釈迦牟尼仏、一時に雲集し、広説すること妙法華経の如し。一一の分身の仏、身、紫金色にして、身量、無辺なり。師子座に坐し、百億無量諸大菩薩ありて以つて眷属とす。一一の菩薩、行ずること普賢と同じ。此の如く十方無量諸仏菩薩眷属も亦復た是の如し。大衆、集まり已りて、釈迦牟尼仏を見、拳身の毛孔より金色光を放つ。一一の光の中に百億化仏あり。諸分身の仏、眉間の白毫大人相の光を放ち、其の光、釈迦牟尼仏の頂に流入す。此の相を見る時、分身諸仏の一切毛孔、金色光を出し、一一の光の中に復た恒河沙微塵数の化仏あり。爾の時、普賢菩薩、復た眉間の大人相の光を放ち、行者の心に入る。既に心に入り已りて、行者、自ら過去無数百千仏の受持・誦誦する所の大乘經典を憶し、自ら故の身を見、了了分明にして、宿命通等の異なることなきが如くならん。豁然と大悟し、旋陀羅尼・百千萬億の諸の陀羅尼門を得。

この経は、『法華経』の最終章の「普賢菩薩勸発品」の内容を受けたもので、智顛は本経を『法華経』の結経であるとする。ここに、釈尊が放った光明より出現した化仏が光明を放ち、その光が釈尊の頂に入ったり、普賢菩薩が放った光明が行者の心に入る、といった光明の流入が説かれている。また、旋陀羅尼というキーワードも見ることができ、密教経軌に見られたような観法の基盤が表れているといえる。しかし、この経は『法華経』『華嚴経』等の教説が入り込んでいて、それほど古いものではないとされているので、さらに遡って見てみたい。ちなみに『般若経』『法華経』には上記のような特色を持った神変は説かれるが、光明の身体への流入は説かれない。以下に『華嚴経』に説かれる神変の描写を紹介する。

『華嚴経』 「十地品」<sup>17)</sup>

仏子たちよ、そのとき、この如来・応供・正等覚者たちの白毫から「一切智性の神通を具える」という光線が、無数の眷属とともに放たれた。それらはあらゆる十方の一切の世界を余すことなく照らし、世界を右回りに十回旋回し、偉大な如来の神変を現わし、百千コーティ・ニユタの多くの菩薩を鼓舞し、一切の仏国中を六種に震動させ、一切の悪趣や死や生を鎮め、一切の悪魔の住処を隠し、一切の如来が現等覚を悟った仏座を示現し、一切の仏の会衆の莊嚴・威徳を現わし、法界を究め虚空界を限りとする一切の世界を照らし、再び還つて来て、この遍く菩薩の会座の遙か上を右に旋回し、大莊嚴を示し、その光明は菩薩の頭頂に没入した。そして、その眷属の光線も同様に、集まったその菩薩たちの頭頂に没入した。これらの集まった光線よつて即座に、その菩薩たちは未曾有の百千の十倍の三昧を得た。これらの光線は、同時にその菩薩の頭頂に没入した。その菩薩は正等覚の境界に灌頂されたと言われる。しかして十力を円満することによつて正等覚者となる。<sup>18)</sup>

『華嚴経』 「性起品」<sup>19)</sup>

さてそのとき、世尊の白毫から「如来の出現」という光線の輪が百千コーティ・ニユタの無数に多くの光線を伴つて生じ、それが世界のあらゆるところを余すことなく照らし、世界を右回りに十回旋回し、如来の神変を現わし、百千コーティ・ニユタの多くの菩薩を鼓舞し、一切の世界を遍く震動させて、一切の悪趣の相續である生と死を鎮め、一切の悪魔の家を制圧し、一切の如来は現等覚した。(そして)悟りの座を現わし、仏の衆会を莊嚴し、無限に示現し、法界を究め虚空界を限りとする一切の世界を余すところなく覆い、再び

還って来て、菩薩の会座を右に旋回し、如来性起妙徳菩薩の頭頂に没入した。<sup>20)</sup>

「十地品」「性起品」共に、世尊の白毫から放たれた光明が世界のあらゆるところを巡り、様々な救済をもたらした後、菩薩の頭頂に入る。「十地品」ではこれによって第十地の菩薩は正等覚者の資質を得るのである。そしてこのことを灌頂と呼ぶことが説かれる。

また、「性起品」では光明の流入により如来性起妙徳菩薩に質問者としての素質が宿り、続いて世尊の口から光明が放たれ、今度は普賢菩薩の口に入る。これによって普賢菩薩は如来に代わる説法者としての特性を得て、如来性起妙徳菩薩と普賢菩薩の問答により經典は進行する。

以上のように、「光明の放出」「光明の旋回」「光明の効果」「光明の流入」「説法相の獲得」といった密教経軌に見られた要素が網羅されており、正念誦作法の観文、延いては密教行法の根幹をなす入我我入観の萌芽が『華嚴経』の神変思想にあると考えられるのである。

## 5. まとめ

現行の次第における正念誦の観文について、その典拠を探ってみたところ、大乘經典に説かれる神変、特に『華嚴経』の神変を起源とする可能性を指摘することができた。その神変とは、仏が説法の象徴である光明を放って、その光明が十方世界を右旋し遍く照らし、さまざまな利益を齎したのち、菩薩の身体の中に入りこみ、それによって菩薩は如来としての資質、また説法者としての特性を得るというものである。正念誦は身・口・意の中の口密に関して如来と一体となる行であり、行ずるときには説法印を為す。ここで結印される説法印は、まさ

しく語密念誦である正念誦の象徴であるし、行者の誦する真言陀羅尼がそのまま諸仏の説法をなることを意味するとも考えられよう。

現行の次第では省略されているが、本尊と自身とを行き来する陀羅尼の文字は光明を伴っており、その光明は十方の全世界を廻り教化するような力を持つ。その光明は仏の説法の象徴であり、その光明が自らの身体に入り込むことで仏の特性を得る。そのような壮大な神変の思想が、我々が日々修する正念誦作法に組み込まれているのである。

また、神変思想は、ある意味、大乘仏教のファンタジックな世界観を演出するためだけのものとして捉えられてきた感もあったが、梶山氏が「初期大乘仏教においてもっとも基本的かつ中心的な意義をもつ思想である」と唱じたように、我々が修する密教の行法の中においても、核の部分の基盤となっている重要な思想であることが確認できた。

註

(1) 『智山伝法院選書・十八道念誦次第講義録』10-1 (2004)  
p. 157, 11-14

また頼瑠の『薄草子口決』によると「入我我入・正念誦・字輪観は是れ、各の別の観に非ず。只だ入我我入の一観なり。

本の経儀軌等の意の主旨、只だ一種の観なり。人師、私記を作る時、行者をして覺り易からしめんが為に各の別に之を列ぬ。且つ自覺・覺他・覺道圓滿の三義、之を了知せしむ」

(T79, No. 2535, 215a13-17) とあり、もともとこの三種の作法は入我我入のための一つの作法であったが、覺りやすくなるために三種に分けられたものであるとする。

(2) 中村『仏教語大辞典』「正念誦」の項参照。

(3) 『秘蔵記』定本弘法大師全集 第五卷、p. 151, 4-8

(4) 上田靈城『改訂真言密教事相概説―四度部―』同朋舎 (2002)  
p. 178

(5) T79, No. 2535, 214c26

(6) T20, No. 1031, 6a2b-63

(7) 観文に関するものではないが、正念誦作法の直接の経軌として『蘇悉地經』の所説がとくに有名なので紹介しておく。

善無畏訳『蘇悉地羯羅供養法』(T18, No. 894, 702c21-703a5)

「正念誦の時、本尊形を觀じ、或いは真言の所有の文字を觀ず。或る時、彼の本尊の心上に真言の文字あるを觀じ、或いは寂靜心にして念誦を作せ。念誦の法は、急ならず緩ならず、亦た声高くならず亦た太だ小ならず、中間にして余の人の語と共にすべからず。亦た諸の外境界に心緣ならず。真言の文字、訛錯を得ず。当に本尊を觀じて目前に對するが如くせよ。晨暮の二時は遍數、須らく足るべし。午時は半乃至少分に減ず。真言中に於いて其れ唵字、及び歸命字あるは、應に寂にして心誦すべし。若し息災・増益の事を作さば、應に小声を以つて念誦すべし。真言に其れ餘字、及び泮吒字あるは、應に嗔猛に誦すべし。若し他を損ずることを作さば、誦念の時、余の人に聞かしむるべし。凡そ真言の字数に多少あり。一より四に至るは、應に數の一俱厭遍に満つるを誦すべし。五字より十五字に至るは、一の字の數、落又遍を誦せ。十五已上三十二字に至るまで、三落又を誦せ。數、此れを過ぎたるは、一萬遍を誦せ。一時に於いて法の如く念誦せよ。」

この『蘇悉地羯羅供養法』所説の念誦作法には、声の出し方や返數について具体的な指示が説かれている。「念誦の

法は、急ならず緩ならず」というくだりは、現行の念誦次第『四度次第・十八道念誦次第』p. 101、注記3にも「輪転すること緩かならず急ならず」と指示されるところである。また『蘇悉地羯羅經』では次のように説かれる。

善無畏訳『蘇悉地羯羅經』(T18, No. 893, 618c14-21)

「正念誦の時、若し營咳・昏忙・欠呿して、真言の字を忘るることあらば、即ち起つて水に就き、灑淨の法を作せ。縦い數珠を拵つて、一を欠いて匝らさんと欲するに、斯の病み至ることあらば、灑淨し訖已つて、還つて首めより念ぜよ。上の如く説く所の障道は、為に一一に皆始めより心に念ずべし。數珠を拵つて將に畢らんとする時には、礼を申べて一拝し、終りて復た、始めよ。又、一礼を画像の前に申べよ。或いは塔の前に於てし、或いは座する所に於てし、念誦の処に隨つて、數珠一匝しては一たび尊顏を觀て、一礼を作せ。」

正念誦のときは、ゆめゆめ咳き込んだり、眠くなつたりしてはならず、そのようなときは定を起つて灑淨によつて淨めて、最初からやり直さなければならぬ。本尊瑜伽に專注して心を散乱させたり、遍數を飛ばしたりしてはならないとされる。

(8)

旋陀羅尼とは『密教大辞典』によると、「具には旋陀羅尼字門と云う、陀羅尼字輪に於ける一々の梵字の意義を順逆自在に旋転して積するを云う。密教の意は一字に無量の義趣を含むが故に之を積するにも旋転自在の積を用う。『大疏』

七に旋陀羅尼の積相を示して一字釈多・多字釈一・一字成多・多字成一・一字破多・多字破一・順旋転・逆旋転の八種旋転を明かす、皆な弘法大師所説の十六支門の中に撰せらる。「とされるが、<sup>10)</sup>では陀羅尼を行者の心月輪上で旋転する<sup>11)</sup>と<sup>12)</sup>の意味で用いた<sup>13)</sup>。

(9) T20, No. 1092, 293a7-13. 『不空羂索神変真言経』にはサンスクリット・チベット語訳があるが、この箇所は漢訳のみに見られる。

(10) この普通心印真言は、わが国では、天台系六観音(聖・千手・馬頭・十一面・如意輪・不空羂索)に属する不空羂索観音の真言とされている。

大正大学総合仏教研究所密教聖典研究会『梵漢対照『不空羂索神変真言経』呪文集成』ノンブル(2004) p. 84, No. 199 Ms. hrdayadhāraṇīmudrā (心真言陀羅尼<sup>14)</sup>, cf. No. 194) or amoghapāśa-kalparājāhrdaya (不空羂索儀軌王心真言<sup>15)</sup> Ms. 68b1-2, D. 128b4-5, Ch. 291c5-13, namas trāiyadhvikānam tathāgatānam / om amoghpadm apāsakrodhakarṣaya praveśaya mahāpaṣupati yanavarūnakuberabrahmaveśadharaḥ / amoghahrdayapadmakulasamvāya huṃ huṃ huṃ phat phat phat svāhā //

「三世の諸如来に帰命し奉る。オーン、不空蓮華羂索忿怒尊よ、引き寄せ給え、入らせ給え、「汝は」偉大なバシムパチイ・ヤマ・ヴァルナ・クベーラ・梵天の姿をもじ尊なり。不空なる心髓である蓮華部の三昧耶[ある者に帰命し奉る]」

フーン、フーン、フーン、パット、パット、パット、スヴァーハー。」

(11) T19, No. 1020, 709b20-29

(12) T21, No. 1289, a24-b1

(13) T21, No. 1211, 48a14-b16

(14) 梶山雄一『梶山雄一著作集 第三卷 神変と仏陀観・宇宙観』春秋社(2012) p. 237, 3-4

(15) T9, No. 277, 391b7-22

(16) 望月信亨「観普賢菩薩行法経成立考」『清水龍山先生教育五十年古稀記念会』(1940) p. 597, 6-9

(17) 『六十華嚴』: T9, 572b2-15] [八十華嚴』: T10, 206a8-19]

(18) atha khalu bho jīnaputrāḥ sarvajñātābhījñāvātyo nāma rāśmayas teṣāṃ tathāgatānāmarhatāṃ samyaksaṃbuddhānām ūrnakośeḥbho nīscarantya asaṃkhyeyaparivarāḥ / tāṃ sarvasū dasasū dīksū aseśataḥ sarvalokadhātūm avabhāśya dasākaraṇaṃ lokāṃ pradakṣiṅkṛtya mahanti tathāgatavikurvīṇi saṃdarśya bahūni bodhisattvakoṇiṇiyutāsatasahasraṇi saṃcodya sarvabuddhākṣetrāp rasarāṇ śaḍvīkaraṇaṃ saṃprakamya sarvāpāyacyuṭigatyupapattiḥ prasānya sarvamarābhavanāni dhyaṃkṛtya sarvataṭhāgatābhīsaṃbodhivibuddhabuddhāsānāny upasaṃdarśya sarvabuddhapaṭṣāmanāṇḍalavyūhaparābhāvaṃ nidarśya dharmadhātuparamāṇ ākāśadhātuparyavasānān sarvalokadhātūnavabhāśya punar evāgātya taṃ sarvāvantāṃ bodhisattva-



現代密教 第30号

正念誦  
神変  
華嚴經  
〈キーワード〉